

ハンセン病問題とジャック・ロンドン

辻井 榮 滋

I

ジャック・ロンドン(1876-1916)とハンセン病? 『野性の呼び声』と『白牙』のみでロンドンを理解してきた日本の大半の読者にとっては、あるいは想定外の取りあわせかも知れない。

にもかかわらず、あまりにも広範で多様なジャンルを誇った作家であったとなれば、両者の関係の意外性をそれほど強調するまでもないかも知れない。「生と死」は彼の文学を考察するうえで避けては通れない大きなテーマの1つであり、とりわけ死について彼は、若い頃から過敏なまでに意識しつづけていたのだからなおさらである。そのうえ、地球を駆けぬけた冒険作家となったロンドンには、大なり小なり病気や死が付いてまわるようなところがあった。思いつくままに列挙してみるだけでも、凍傷・壊血病・水腫病・イチゴ腫・乾癬¹⁾・二重瘻管・盲腸炎・腎臓疾患・尿毒症・リウマチといった自らも体験した傷病が相当数あり、おまけに赴いた世界の先々で数多^{あまた}の人々の死や病や負傷を目撃したとなれば、ハンセン病もその1つであったとしても何の不思議もないのかも知れない。事実、『スナーク』号という自前の帆船で南太平洋を航海した折、「11月14日(1909年)、『マカンボ』号はシドニーに到着した。リード博士が乗船し、ジャックの皮膚の問題を乾癬と診断した時、ジャックのハンセン病の心配は和らいだ²⁾」〈傍点引用者〉の通り、事実彼の脳裏にハンセン病があったのである。(この一件については、のちに詳述することとする。)

さて筆者は、2004年6月に、「ハンセン病を扱ったJ・ロンドンの2短篇」と題して“Koolau the Leper”と“Good-bye, Jack”を翻訳し、「訳者ノート」とともに発表³⁾した。そしてそのノートを、「近いうちに、他の文章をも含めこれら2篇の作品を中心に論究してみたいと考えている」と結んだ。以来3年近くが経過したが、この間、様々な資料を渉猟するなかで、単にロンドンのハンセン病ものに限定するだけでは不十分であることに気づいた。すなわち、もっとマクロ的な観点からハンセン病を捉え、そののちにロンドンの仕事へと収束させてみる必要があるということである。筆者自身、ハンセン病問題の専門家でないことは言うまでもないが、世の大半の人々同様に無知・無理解であったことへの自省の念も込めて、まずわが国におけるハンセン病問題の現状をある程度把握し、過去へも多少さかのぼってみることから始めることを思い立った。

II

i) 新聞報道から見る日本におけるハンセン病問題

ハンセン病隔離違憲

国に18億2千万円賠償命令

との、元ハンセン病患者ら127名の求めた賠償訴訟に対し熊本地裁が示した画期的な判断をトップ記事として大々的に報じたのが、21世紀が始まって半年足らずの夕刊⁴⁾であった。この一報が、筆者を動かした。それでも、上述のロンドンとのかかわりを承知していなかったならば、おそらくは単なる1つの大きな事件として読み流し、この問題を取りあげて考察してみるまでには至らなかっただろう。彼がハワイを訪問し、ハンセン病患者たちと交流し、その訪問記や短篇小説までもいくつか書いていたのを承知していたことによって、この大問題と直面したのだった。百年も前のロンドンの時代の病の問題は、決して過去のことどころか、21世紀の今日までも連綿とつながっていたのである。

熊本地裁の判決が出て2週間足らずの2001年5月23日には、時の小泉首相が控訴を断念するというニュースが全国を走りぬけた。翌24日の朝刊は、一面トップで（関連記事も含めると、2・3・5・26・27の5頁にわたり、いずれも破格の扱いで）これを報じた。一面トップでは、

ハンセン病 国が控訴断念

全面解決へ首相決断

とある。同じく白抜きだった5月11日付夕刊の大見出し「ハンセン病隔離違憲」の1.5倍、長さ（最初の11文字）は1面の最上段の両端まで使いきる（約33センチ）扱いであった。この横断の大見出しのすぐ下には、「国の控訴断念を訴えるハンセン病訴訟原告の1人1人と握手する小泉首相（23日、首相官邸）」とのキャプションが添えられている。このカラー写真だけでも、相当な大きさ（19センチ弱×11.8センチ）である。地裁判決といい、国の控訴断念といい、事の重大性が歴史的にも社会的にもいかに計り知れないものであったかを如実に物語るものであった。筆者は、この5月24日当日の朝刊をそっくり保存しており、折にふれ読みかえしている。同社説（p.5）には、過去にさかのぼる経緯と問題点が記されている。

元患者らにとって待ちに待った朗報といえるが、失われた人生と人間の尊厳が戻るわけではない。こうした痛みに鈍感な行政や政治の責任はあらためて問われねばならない。（中略）

1953年のらい予防法制定当時はすでに治療薬が開発され、隔離の必要性がなかったことは明白だ。にもかかわらず、あえて立法に踏み切り、96年の廃止まで漫然と非人道的な隔離政策を行った。ある意味で犯罪行為である。政府内や国会議員の間で控訴断念の声が上がったのはまだしもの救いだった。

福田官房長官は控訴断念の一方で熊本地裁判決は「重大な法律上の問題点があり、本来なら控訴の手続きをとらざるを得ない」と見解を述べた。いかにも未練がましい態度だ。（傍点引用者）

この引用文、とりわけ傍点を打ったあたりに事の本質や事態の重大性があるように思われる。なかでも、隔離政策とそれが社会に及ぼした甚大な影響（偏見と差別）が、問題解決を遅らせた2大元凶であるだろう。

社会に及ぼした甚大な影響のほうは、先の熊本地裁の判決と国による控訴断念という画期的な2大事によって即刻終止符が打たれたわけではない。その後2年半ほどしか経過していない2003年11月21日には、次のような新聞報道があった。

熊本県南小国町の「アイレディース宮殿黒川温泉ホテル」がハンセン病元患者の宿泊を拒否した問題で、熊本地方法務局は20日、旅館業法違反容疑で近くホテル側を告発する方針を固めた。（2003年11月21日、p.31）

というのだ。事の発端として、

熊本県はハンセン病患者を対象に実施する「ふるさと訪問事業」の一環で、9月に約25人分の宿泊をホテルに依頼、承諾を得た。

しかし、11月になって県が宿泊者がハンセン病元患者らであることを伝え、ホテルは一転して拒否。県がホテルを経営する会社も含め説得を続けたが、ホテル側は方針を変えず、宿泊拒否を正当化したという。（同上）

まさにこの事件が、今日ただ今のわが国における偏見と差別の実態を浮き彫りにしているように思われる。しかもこれに限らず、似たような事件・事例が国のあちこちでいまだに見え隠れしているのである。

その後、熊本地裁の判決後に厚生労働省の設置した第三者機関である「ハンセン病問題に関する検証会議」は、2004年4月12日に中間報告書を、そして2005年3月1日には最終報告書を提出した。前者を新聞報道（2004年4月13日、p.29）から見ると、

この時期（1960年代後半）は経済成長期で療養所入所者の社会復帰がピークを迎え、法改正が可能だったのに ①国民や国会の理解が進んでいない ②療養所での医療や、生活面の処遇改善を優先する——との認識が厚生省全体にあり「絶好の機会を逃した」と指摘した。

「強力な伝染力がある」「遺伝病」「完治しない」など明らかな誤りを広めた当時の医学、医療界に対しては「独善と非科学性に満ちており、隔離政策のために矛盾した論理を持ち出して恥じない行政の道具だった」と厳しく断罪した。〈傍点引用者〉

とあり、後者は計約1,500頁に及ぶ大部なもので、隔離政策を様々な視点からきびしく批判している。その核心は、

昭和初期に始まった法による隔離が、治療可能になった戦後も維持拡大されたのは「医師の妄信や怠慢に国が治安などの観点から便乗し、旧厚生省が療養所の予算獲得を優先した結果」とし、行政の誤りを支えた教育、司法、報道の責任も指摘した。〈2005年3月2日、p.1、傍点引用者〉

であり、このほか保健所、福祉界、宗教界等に至るまで偏見・差別を煽動・助長したものと批判・検証した。

報道の責任については、この最終報告書の出た3日後の同年3月4日の社説で「ハンセン病検証」と題して、以下の段落で結んでいる。

人権の獲得と処遇の保障は別ものだ。しかし、マスメディアの関心が薄れ、法律家が責任放棄、社会の無理解もあって、入所者を法の改廃運動に慎重にさせたとの記述は、決して忘れてはならない、と思う。(p.7)

と、強い自戒の念を込めている。なるほど、熊本地裁判決以降筆者が記事を追う目も変わったのかも知れないが、たしかにハンセン病をめぐる記事の数はかなり増えた。が、「喉もと過ぎれば」にならないように、つねに偏見や差別を逃さず社会に対する啓発活動を継続してもらいたいものである。

ii) 他の文書から

熊本地裁判決以降のハンセン病をめぐる現状について主に新聞報道を追いながら、その問題点を辿ってきた。ところで、ハンセン病療養所は現在、北は青森の松丘保養園から南は沖縄の宮古南静園まで国立13、私立2の計15カ所ある。奈良県福祉部健康局が出している「ハンセン症を正しく知ってください」というパンフレットによると、総入所者数は3,521名（2004年5月1日現在）で、平均年齢約77歳という。一連の訴訟が起こされ、早い解決が強く望まれた所以である。そしてその後、3,500名いた国立13の療養所では、2006年5月現在になると、計3,080名に減少している。「毎年約200人が死亡、10年後には千人を割り、大半の療養所が近い将来、百人以下になるとみられている」（2007年1月29日付）という。

ここに至ってもなお社会復帰が困難な人たちが大勢いることのほうがより重要であろう。それは、高齢であることも然ることながら、「ハンセン病による後遺症としての障害を持っていること、社会生活体験をほとんど有していないこと、一般社会にまだまだ強い偏見の残っていることなど」⁵⁾〈傍点引用者〉によるという。さらには、

社会での受け皿としての家族のないこと、とくに子どもを産むことをハンセン病施策のなかで認めなかったことも⁶⁾

大きな要因になっている。

ここで、「ハンセン病国賠訴訟を支持する会・熊本」の会長であり医師の小説集『故郷に帰りたい』^{ふるさと}の中からいくつか紹介し、上掲の報道と重ねておきたい。2作めの「原告番号889番」にはこうある。

病気が治らぬという運命論的な絶対隔離の絶滅主義は、国家体制を防衛する政治的な絶対隔離の絶滅主義に変質進展した。狂暴な国家意志が剥き出しとなった。村から地域から、町内組織を利用して病者を根こそぎ炙り出すことを図った。国民のらい病への恐怖心を煽り立てて運動の推進力とした。だが表

面的には、プロミンの効果は経過を見なければわからぬという医学上の要請と、社会的な偏見差別から患者を保護するという美名が被せられた。患者絶滅の旗を掲げるらい病医療で主導的立場にいた療養所所長と厚生省官僚との利害は一致していた。⁷⁾〈傍点および下線引用者〉

傍点についてはすでに引用したり考察したことを裏づけるものだが、下線部についてはまだ本稿では触れていない、いわゆる「無らい県運動」として1929（昭和4）年に始まった保健所への恐るべき通報制度のことである。

4作めの小説「ミイラが語った定説」からもう少し拾っておこう。

昭和28年の予防法成立がなければ、仕事に勤しみ、自ら財産を蓄え、子供を育てることができたであろう。あのとき、俺達の身体から既に菌は消え去っていた。否、百歩下がって、抗菌剤により消え去る予定であった、と言ってもいい。その結果、普通の生活ができたはずだ。それなのに、予防法のおかげで偏見差別が国中に固定化されてしまった。⁸⁾〈傍点引用者〉

1907（明治40）年公布の旧法が1931（昭和6）年4月に改正されて「癩予防法」が公布された。1915（大正4）年にはすでに結婚する患者に対して断種手術が始められていたが、1948（昭和23）年の優生保護法でそれが法制化され、しかも1953（昭和28）年にはまたまた新しい予防法が制定されて、強制隔離政策が維持され、それが様々な悪弊を半世紀もの間温存し、今日にまで尾を引くことになったという次第である。（しかも、この悪法が廃止になったのは1996年4月のことだから、その長年月にわたって及ぼした影響力は甚大であった。）抗生剤プロミンがアメリカで開発されたのが1943（昭和18）年であり、その数年後（1949年）には日本でも全療養所で投与されていたというから理不尽この上ない。

同じ小説の上掲の引用箇所の直後には、

……故郷を返せとは言わない。親兄弟との絆を返せとは言わない。失った人生を返せとは言わない。ただ一つだけ言いたい。二度と同じ過ちを犯すなど。

わかってくれ。このことを国に言わんがために裁判に打って出たのだ。何故、判断を誤り、その状態が半世紀にも及ぶ、長きに亘り続いたのか。理由があるはずだ。誰かが判断を誤り、法の条文ができあがり、専門家が国会で審議して成立した。その過程に何が不足していたのか。また法執行において、誰が間違い、何が法の栄養となり血となり、脈々と生命を維持できたのか。人間がすることには間違いはつきものだ。だが、ここを解明しておかねば、必ず同じ間違いを繰り返すことは歴史が証明している。永俣病然り、HIV然りだ。⁹⁾〈傍点引用者〉

とある。これら3つの引用箇所はいずれも、簡潔にして要を得た諸問題の炙り出しに成功している。そして行間からは、元患者・入所者たちの断腸の思いや積年の悔しさがあふれ出ており、読む者を突き動かさずにはおかない。

こうしていくつも資料にあたってくると、ハンセン病をめぐる悲惨極まる実態を主導していた人物に登場してもらわざるを得なくなる。その名は光田健輔である。岡山の長島愛生園のある入所者は、

戦前戦後を通してハンセン病医療のトップに立っていた光田健輔は、国際的な開放医療の潮流を無視して、絶対隔離政策推進の主導的役割を果たしてきました。療養所内に閨閥の網を張り巡らせ、その影響力は予防法が廃止されるまで続いていました。〈傍点引用者〉¹⁰⁾

と証言し、具体的には

プロミンで治ったという噂は私の耳にも入っていました。ところが園長は、プロミンの効果を否定し、怒って、カッカした。

「なにがプロミンか。らい病の小僧が、園長に楯突くとはなにごとかつ！（後略）」¹¹⁾

といったやり取りをあれこれと述べている。この光田を先頭にひと握りの医師らと国が結託して、その権益を死守するために療養所を楯に取り続けていたのである。別の入所者は、「90年間にわたって国がまき散らしてきた偏見¹²⁾」と表現している。そして悪法のせいで、片っぱしからと言ってもよいほどに収容されていった人たちの数も計り知れない。さらに別の入所者は、こう証言する。

私は警察官をしていました。1942（昭17）年10月、鼻の横が少しだけ赤く腫れたら、県の衛生課で診てもらえと言われたんです。（中略）

検査をするから1週間ぐらいいなさいと言われ、鼻汁検査しただけで、そのまま入れられて60年。いったん入ったら帰れないものだから、今日までずうっとここにいます。（中略）

私はどこも全然悪くなかったのに、（中略）24歳で入所して、いま83歳です。¹²⁾〈傍点引用者〉

無らい県運動や「癩予防法」、「優生保護法」、「新らい予防法」等が、これでもかこれでもかと国民を恐怖と疑心暗鬼と屈辱のどん底に落としこんだのだ。最後に、療養所内における数ある仕打ち¹³⁾のなかでも最も悲惨なもの1つであった、結婚すれば断種・墮胎を強要というものについて、同じ元警察官の入所者が断種手術の体験を語っている。

手術前、看護婦さんたちが局部の毛をカミソリで剃るでしょう。1日、何人もの毛を剃るから、豚なんかを相手にするように冗談を言い合っている。それを聞きながら手術台に上るなんて、私はまだ20代だったから耐えられなかったです。差別どころの話じゃない。これは屈辱です。この気持ちは、された人間じゃなければ、とうていわからない。¹⁴⁾〈傍点引用者〉

同じく女性の墮胎の場合にしても、残酷きわまりない。まるで血も涙もなく、人権蹂躪もはなはだしかったのである。

iii) 「社会が病気を作り出す」

新聞報道とその他の文書を読むことで、ハンセン病をめぐる様々な問題が見えてきた。共通のキー・ワードを列挙すれば、大よその枠組みもそれなりに把握できよう。悪名高いらい予防法、数十年に及ぶ療養所での強制隔離生活（入所者によって異なるが、長い人で60年以上～50数年も珍しくない）、無らい県運動、偏見と差別、断種・墮胎のほかにも、偽名を名のらされる、死ぬまで収

容を前提とする遺体解剖承諾書等によって、入所者たちは雁字搦めにされてきたというわけである。

これらのキー・ワードから透けて見えてくるのは、国家という美名に庇護された特権階級や権力を振りかざす者たちの意志ないしは私意である。まさに人の弱みにつけ込んだとしか言いようのない傍若無人の1世紀であった。静岡大学の栗岡幹英氏が、「「病気は自己責任」でよいのか」と題していみじくも書いている。

……ハンセン病のように国家によって通常の社会生活から強制的に隔離されることすらある。国が病気であることに対する理由のない差別と迫害を率先して行っていたのである。¹⁵⁾

そして、「病気とはむしろ、社会にとって不都合な個人の状態をくくるカテゴリーなのだ。（中略）社会が病気を作り出している」とまで書いている。¹⁶⁾ そう言えば、前掲の水俣病や HIV はおろか、各種性病、コレラ、バスト、結核等も「社会にとって不都合な」病であった。

ハンセン病の歴史は、思いのほか長い。聖書にも登場することはよく知られているが、インターネットの「ハンセン病の解説集Ⅱ」によると、『日本書紀』22巻には、

推古天皇の二〇年（612）に百濟からの帰化人のうちの一人に、顔面に白斑のできた者があり、白癩と疑われて海中島へ島流しになろうとした。しかし、その人は庭造りの名人であったのでこれを許し、

南庭に須弥山と呉橋をまねた庭を造らせた。この人は路子工あるいは「しこまろ」と呼ばれた。

とあり、この記述をはじめとして、^{あまた}数多の文書に「癩」に関する言及があったことを載せている。近世に至っては、「その家系だけの悪しき「家筋」「血筋」による遺伝病の類と病因を捉える考え方が流布されてくる」¹⁷⁾〈傍点引用者〉ようになる。こうした考え方を増幅させたのが数々の芝居であり、「…「身寄りの者に筋がある」と、「癩病」は「家筋」「血筋」の遺伝病だと、舞台からも示唆¹⁸⁾していたという。それらが「癩を弄んだと言いたい。もしそれが現在に残る迷信の助成に与って力があつたとすれば、その罪は大きい」¹⁹⁾との指摘もある。そして、そうした説話・迷信の類いは明治維新を経てもほとんど変わることがなかった。1906年当時においてなお、「政府の公的調査で、「癩病」が伝染性疾患でなく、発育的・体質的疾患、つまり遺伝・「家筋」の病とされていたことが問題なのであり²⁰⁾、そうした姿勢・体質はすでに見た通り、その後も延々と受け継がれていったわけである。公的にそうであったのなら、巷間においては何をか言わんやである。

III

日本におけるハンセン病にかかわる諸問題を多少時代をさかのぼる形で追究してきたが、事は無論わが国に限られるものではない。世界でハンセン病患者が最も多い中国・ブラジル・インド²¹⁾では、まだこの問題は解決されていない。「1980年代、世界には推定で1000万人から1200万患者がいましたが、現在では約40万人と著しく減少²²⁾」てはいるものの、根絶できたわけではないこ

とも念頭に置きながら、本章では目を海外——それも、J・ロンドンとかかわるハワイ——へと移してみたい。

一般的にハワイと言えば、ポリネシアに浮かぶ地上の楽園として持てはやされ、毎年世界中から大勢の観光客が押し寄せる夢の諸島である。北西から東南に大小8個のダイヤモンドの粒を並べたような島々のなかでも、その中心は何と言ってもホノルルのあるオアフ島である。州人口全体の7割以上を占め、面積も8つの島のなかで3番めである。その7倍近くもある、群を抜いて大きなハワイ島（岐阜県に相当）は別格として、2番手のマウイ島、4番手のカウアイ島とはそれほど大差がない。

このオアフ島の東隣に位置し、ハワイ諸島のほぼ中央部に存在するのが、モロカイ島である。東西に61キロ、南北に16キロの、前記カウアイ島に次ぐ5番め（わが国の対馬に相当）の面積を有する。（実はこれら2つ——オアフとモロカイ——が、J・ロンドンの作品の中心舞台となる島なのである。）この東西に細長い形をしたモロカイ島の北岸の中ほどに、目立って突き出した半島がある。これが、カラウパパ半島と呼ばれる所である。

縁あって、鳥取県米子市立図書館から取り寄せた同人誌『麓人』71号（2001年6月）を読む機会に恵まれた。その巻頭を飾っていたのが、荒井玲子氏による「元ハンセン氏病患者の隔離島—モロカイへの旅—」と題する紀行文であった。それによると、彼女は息女とともにこの島を訪ねたという。

南海の青い海の中に半島は美しく孤を描いていた。穏やかな島。散歩がてら誰でもすぐに行けそうなカラウパパ。私の目差すのはモロカイ島の中のカラウパパであった。

ハンセン氏病の人達を閉じ込めたという事が信じられないほどに静かで美しい島。（p.8）

ところが、この半島の背後には高さ約2,000フィート（後述のJ・ロンドンによれば、2,000～4,000フィート）もの絶壁がそびえ立っている。車が通れないため、ここまで辿り着くには①徒歩か②ロバによる往復ツアーか、あるいは③「カラウパパコロニー内のカマコウという小さな滑走路にセスナ機で往復飛ぶ」かの3通りしかない。荒井氏母娘は①を選び、「トレッキング入口から1時間余り」かけてカラウパパへと到達した。そこで計4時間のカラウパパ観光をしたあと、帰路には2時間以上かかったようである。何しろ、

俯いて足元を見つめながら岩道を辿って行く。ゆっくりとボコボコ歩くロバと思っていたが、人間の足とは雲泥の差があり、さっきまで一緒だったツアーの人達を乗せたロバは、いく曲がりもの崖路を曲がってもう誰の姿もない。（p.14）

といった細く険しい道であり、次稿でロンドンの作品の中にも登場する大自然が造形した断崖絶壁そのものなのだ。余談だが、本稿を執筆中の2007年3月9日に「報道ステーション」（テレビ朝日）が、東京から南へ1,000キロ離れた小笠原諸島の父島を上空から間近に写す番組を組んでいた。島の南端の100メートルを越す絶壁から1歩入ると、亜熱帯の原生林が鬱蒼と茂っており、人が足を踏み入れたことがないという。そして、海は海でそれはみごとな藍色であり、世界有数の透明度を誇っている。この映像を鑑賞しながら、筆者は遠くモロカイのカラウパパ半島の背後

の絶壁と紺碧の海のことを思い描いていた。（ちなみに、まったく偶然だが、小笠原諸島と言えば、ロンドン17歳の時（1893年）にアザラシ狩り船に乗り組んで、日本近海を北上したのだが、その際最初に上陸したのがこの小笠原諸島（彼にとっては最初の外国）であり、彼の習作期の作品に“Bonin Islands”（文字通り「小笠原諸島」²³⁾）という小品がある。）

さて、前三方が海、後ろはそそり立つ絶壁に挟まれたこの岬がカラウパパ半島であり、遠く1865年以降ハンセン病患者たちの隔離地となってきた。まさにこの地こそは、あの高名なベルギー人宣教師ダミアン神父が

1873年、モロカイ島に流されたハンセン病患者の惨状に深く心を動かされ、自ら志願して隔離地に移り住み、宿なき人のためには家を建て、指なき人のためには膿を洗い、ほう帯を取りかえて介抱し、自暴自棄になってすさんだ人びとの心にキリストにおける再生の恵みをもたらした。²⁴⁾

所なのである。1873年と言えば、ノルウェイのアルマウエル・ハンセンが奇しくもらい菌を発見した年（ちなみに、ロンドン生誕の3年前のこと）でもあった。

自身もこの地でハンセン病に感染し、16年間に及ぶ献身活動に終止符を打ったダミアン神父についてはあまりにもよく知られていることであり、ここで繰り返すことはしない。ただ、前章とのかかわりで2、3引いておきたいことがある。

治る見込みのない患者は、「生きながらの墓場」と呼ばれたカラウパパに送られ、この地でなくなったと知り、孤島につくられた日本の療養所は、カラウパパがモデルだったと確信したのです。

しかしハワイと日本の大きな差は、ハワイではたとえ患者であっても子どもを産めたのに、日本では優生保護法により劣性の烙印を押され、結婚の条件として、男性は断種手術、女性が妊娠すると堕胎手術が強要されたこと²⁵⁾です。（傍点引用者）

また別の元患者（ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会会長）のカラウパパ訪問経験による談話だが、とりわけ傍点を打った「確信」と「差」の部分に強く引き寄せられる。それは、日本の場合との共通点と差異点である。ただ、「差」については、荒井玲子氏が上の訪問記の中（p.13）で、カラウパパ内のガイド兼バスの運転手に質問している。

「日本のハンセン氏病の元患者だった人達は、『らい予防法』というのがあって断種手術をして子供が生めなかった。ここはどうでしたか」

と聞いてみた。

最初ここに連れてこられた時は子供は生めなかったが、特効薬サルフォン剤（プロミン）が出来た頃より、子供を生むことができるようになった。だが子供を生んでもカラウパパで育てることは許されず、島外に出して施設に預けたという。（p.13）（傍点引用者）

日本とは比較にならない早さの対応がなされたようだが、最後の文は若干気にかからないわけではない。

21世紀初頭の現在、カラウパパには数十名の元患者が残っているが、ゼロになるのは時間の問題である。そしてこの地は、大勢のハンセン病患者たちが隔離され、彼らのためにダミアン神父

のような心ある宗教者たちが筆舌に尽くしがたい苦境にあつて慈愛に満ちた救いの手をさし伸べた所として永遠に残され語り継がれていくだろう（1980年末よりカラウパパ国立史跡公園となっている）し、また語り継いでいかねばならない。今またハンセン病以上の恐ろしい感染症エイズが、じわじわと世界中に蔓延しつつあるのだから。

IV

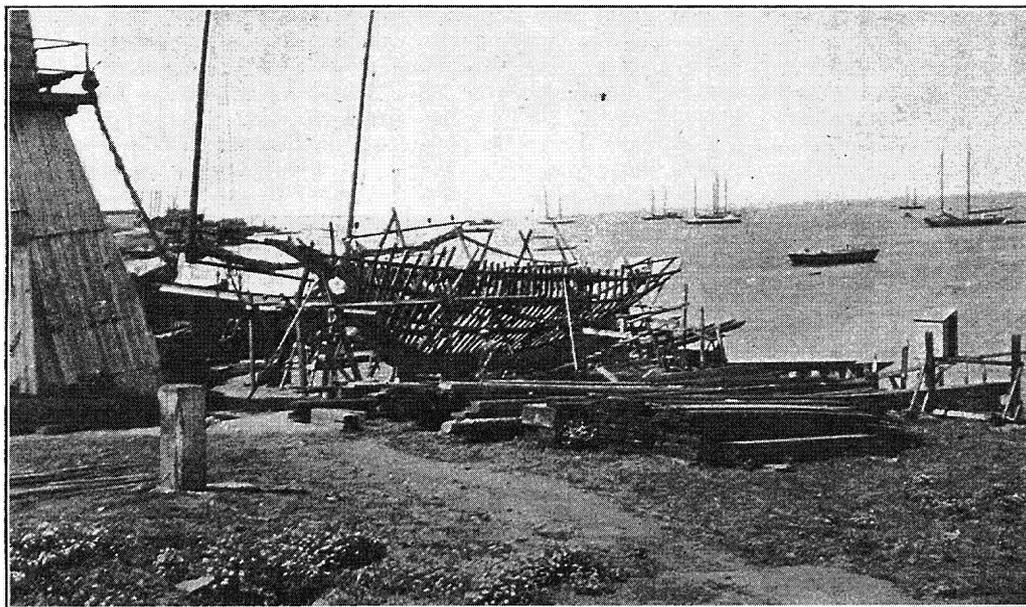
日本およびハワイにおけるハンセン病問題を追ってきたが、ここに至ってようやくJ・ロンドンとの接点が視野に入ってきた。モロカイはさておき、彼は少年の頃から南太平洋に思いを馳せていた。そして、第I章で触れた『スナーク』号による航海でその夢を果たし、しかも、その所産の1つとしての『スナーク号航海記』（*The Cruise of the Snark*, 1911）なるものまで著わしている。そのリプリント版の1つで序文を寄せている Kaori O'Connor も、こう書いている。

As a boy he had read and loved Stevenson's South Sea stories and Melville's *Typee*, and he decided to fulfill his boyhood dream of sailing the Pacific.²⁶⁾

幼少の頃から本の虫であった彼の頭の中で、そうしたスティーヴンソンやメルヴィルの物語が外界（冒険）への夢を育み続けたのだろう。……1906年4月18日にサンフランシスコ一帯を襲った大地震やその他諸般の事情も重なって、その夢が実現したのは彼が31歳（1907年）の時であった。同年4月23日に出帆した『スナーク』号は、5月20日にホノルルのパール・ハーバーに投錨した。途次からすでに船のトラブルがいろいろと発生しており、その修理・補強等に思いのほか時間がかかった。が、そこはロンドンのこと、サーフィンを習ったり、他の島々を訪ねたり、講演をしたり、また多くの知人・友人を得たりして、実に有意義な5ヵ月近くをハワイに過ごした。ハワイ島のヒーロウを出帆して、南太平洋へのさらなる旅を再開したのは、同じ年の10月7日のことであった。

『スナーク号航海記』は、340ページに及ぶ航海の記録である。マーケサス諸島やタヒチ、サモア諸島等々を巡る旅が、全17章仕立てでリアルに綴られている。そこへ大小合わせて119点もの写真（illustrations）が挟まれており、当時の読者を大いに魅了したに違いない。例えば、1～15ページの「序章」中の所々には計5枚の写真（いずれも『スナーク』号建造中のもの）が配置され、真新しい肋材の香りまでが伝わってくるようである。‘The Building of the Snark’とのキャプションを添えた最初の写真（p.9）をほぼ実物大でお目につけよう。（ちなみに、「序章」の5枚めは‘Hull of the Snark’で、もう船体の形を成している。）文章もさることながら、これら数多くの写真を目で追うだけでも、彼らの航海の様子が手に取れるようである。当時の読者のみならず百年後のわれわれにとっても、貴重な資料であることは言うまでもない。

前置きはそれぐらいにして、この航海記の第Ⅶ章が“The Lepers of Molokai”（pp.91-111）、すなわち「モロカイのハンセン病患者たち」である。このモロカイ滞在中に書かれ、まずは *Woman's Home Companion* 誌の1908年1月号に発表された。この雑誌発表時には、“The First



The Building of the Snark.

Letter in the Important Series of First-Hand Impressions for Which the Companion Has Sent Mr. London Around the World”なるサブタイトルが付いている。いわば、直接自分の目に触れた印象シリーズの第1弾との触れこみである。筆者はこの掲載ページのコピーを所蔵しているが、縦40センチ余り横27センチほどの大版である。その最初のページ（p.7）の上半分を使いきり、縦17センチ横約19センチ余りの大きな写真（カラウパパ半島の先端部のほうから、圧倒するような絶壁のほうに向かって撮られ、収容所の建物が小さく点在する風景）がタイトルおよびそれ以下の記事の上に乗っかって、すこぶるインパクトが強い。（これは珍しいので、次ページに多少縮小してもお目にかけよう。）場所といい、題材といい、扱い方といい、編集者の意図が十分に伝わってくる。そしてこの記事は、次のような書きだしで始まる。

WHEN the *Snark* sailed along the windward coast of Molokai, on her way to Honolulu, I looked at the chart, then pointed to a low-lying peninsula backed by a tremendous cliff varying from two to four thousand feet in height, and said: “The pit of hell, the most cursed place on earth.”²⁷⁾

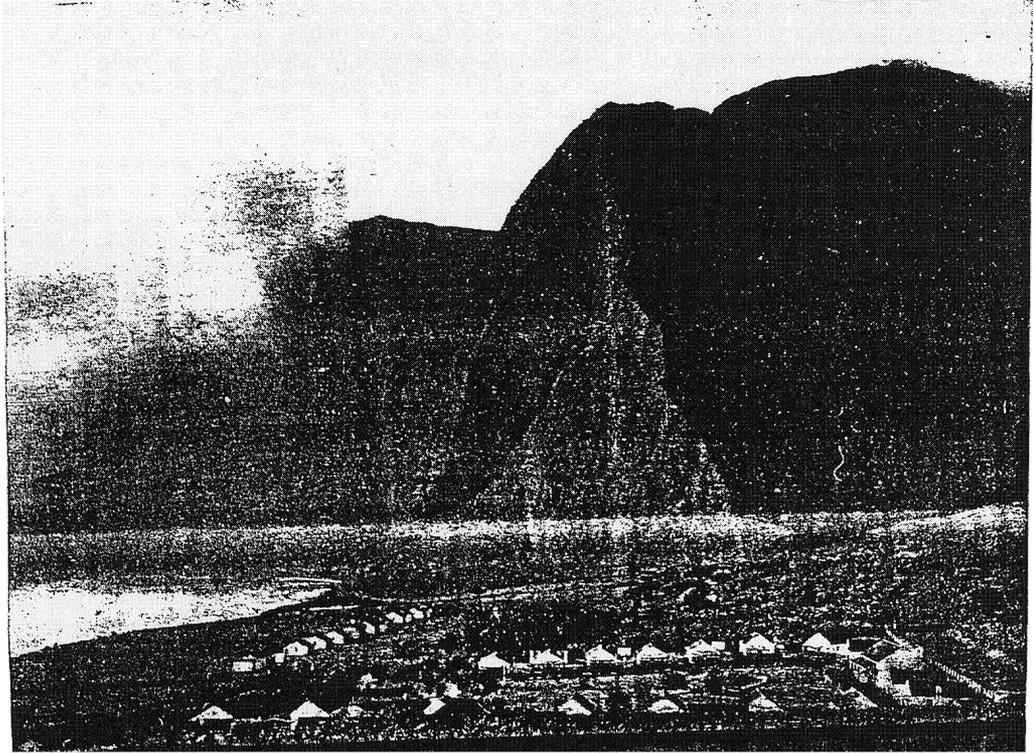
上述の、1907年5月20日のホノルル入港前に、『スナーク』号はモロカイ島の北岸、すなわちカラウパパ半島沖を航行していたのだ。そして、半島の背後に屏風のごとくそそり立つ高さ約66～133メートルものあの断崖絶壁も、しかと目にしていたのである。

ホノルルに着いて40日余りのちの7月1日、ついにロンドン夫妻はモロカイ島に渡る機会を得た。その経緯^{いきさつ}を少し追ってみよう。

公衆衛生局長リュージャス・E・ピンカムが、モロカイのハンセン病患者収容所についての偏見に関

January, 1908

WOMAN'S HOME COMPANION



"The scenery is magnificent; on one side is the blue sea, on the other the wonderful wall of the *pali* receding here and there into beautiful mountain valleys"

THE LEPERS OF MOLOKAI

By Jack London

The First Letter in the Important Series of First-Hand Impressions for Which the Companion Has Sent Mr. London Around the World



WHEN the *Shark* sailed along the windward coast of Molokai, on her way to Honolulu, I looked at the chart; then pointed to a low-lying peninsula backed by a tremendous cliff varying from two to four thousand feet in height, and said, "The pit of hell, the most cursed place on earth." I should have been shocked, if at that moment I could have caught a vision of myself a month later, ashore in the most cursed place on earth, and having a disgracefully good time along with eight hundred of the lepers who were likewise having a good time. Their good time was not disgraceful, but mine was, for in the midst of so much misery it was not meet for me to have a good time. That is the way I felt about it, and my only excuse is that I couldn't help having a good time.

Hawaiian got away together, and rode neck and neck, the Portuguese boy toiling along two hundred feet behind. Around they went in the same positions. Half way around on the second and final lap the Chinese pulled away and got one length ahead of the Hawaiian. At the same time the Portuguese boy was beginning to crawl up. But it looked hopeless. The crowd went wild. All the lepers were passionate lovers of horse flesh. The Portuguese boy crawled nearer and nearer. I went wild, too. They were on the home stretch. The Portuguese boy passed the Hawaiian. There was a thunder of hoofs, a rush of the three horses hunched together, the jockeys, plugging their whips, and every last onlooker bursting his throat, or hers, with shouts and yells. Nearer, nearer, inch by inch, the Portuguese boy crept up, and passed, yes, passed, winning by a head from the Chinese. I came to myself in a group of lepers. They were yelling, tossing their hats, and dancing around like fiends. So was I. When I came to, I was waving my hat and murmuring ecstatically.

I tried to check myself. I assured myself that witnessing one of the horrors of Molokai, and it was shameful for me, under such circumstances, so light-hearted and light-headed. But it was not. The next event was a donkey race, and it was starting; so was the fun. The last donkey in the race, and what complicated the affair was no rider rode his own donkey. They rode one another's donkeys, the result of which was that each man strove to make the donkey he rode beat his own donkey ridden by some one else. Naturally, only men possessing very slow or extremely obstreperous donkeys had entered them for the race. One donkey had trained to tuck in its legs and lie down whenever the rider touched its sides with his heels. Some donkeys strove to turn around and come back; others developed a penchant for the side of the track, where they tucked their heads over the railing and stopped, while a third dawdled. Half way around the track, one do-

心を抱いていた。ハンセン病に関して不合理な不安がハワイ諸島に広く行きわたっていたが、それは単に人々がこの病気を理解していなかったからにすぎない。(中略)新聞は、事態をいっそう悪化させる人騒がせな記事を書くばかりだった。たぶん人々は、ジャック・ロンドンの話になら耳を傾けるだろう！ピンカムはジャックの古くからのファンの人であり、ジャックがいつも見たままのことを語るということを知っていた。そこで、モロカイに渡って、ハンセン病患者たちと1週間暮らし、その体験について書いてみてはどうか、と打診した。ジャック以上に行きたがったのは、チャーミアンただ1人であった。(傍点引用者)

最初の3つの傍点部分は第Ⅱ・Ⅲ章で見た諸問題と相通じるが、残り2つの傍点部分がロンドンに直結するものである。時代が20世紀初頭であること、ダミアン神父が逝ったのがまだ18年前の1889年4月（ロンドン13歳）のこと、プロミン開発までは優に30年以上も前であったこと、そして今日とは時代状況に大きな隔たりがあること等を勘案しながら、「モロカイのハンセン病患者たち」を読むとき、書き手の鋭い観察力ときめ細やかで行き届いたその筆づかいには舌を巻く。

まず口をついて出てきた「地獄の落とし穴、この世で最も呪われた所」が、おそらくはこの当時の一般の人々が抱いていたイメージないしは固定観念だったのである。それが、800人のハンセン病患者たちを目の前にし、彼らと交流（折しも7月4日の独立記念日の午後には、患者たちによる競馬やロバ競争を観戦）し、「村で手に入るかぎりのハンセン病関係の本を読み、何時間も医師たちと語りあ²⁹⁾うことで、上掲のイメージは払拭されていった。

ロンドンは、この収容所の管理者マクヴェイ氏の家に5泊した。そして収容所の実態についてつぶさに書き残した。ハンセン病が思いのほか感染力が弱く、医師たちやマクヴェイ氏にしても弱い消毒剤で顔と手を洗って上着を取り替えるだけであること、そして自分は何よりも「ハンセン病についての一般の誤解を払拭するために」（p.95）ペンを執っていることを強調する。1例として、カラウパバ・ライフル・クラブのマクヴェイ杯争奪射撃会に加わったことを記している。

Lepers and non-lepers were using the same guns, and all were rubbing shoulders in the confined space. (p.96)

患者も非感染者も同じ銃を使い、みんな一緒になってゲーム——野球の場合も同様——に興じているというのである。

また、患者たちがモロカイに送られるまでの入念な検査と彼らへの人道的な対応の仕方についても、詳細に記録している。

In the first place, the leper is not torn ruthlessly from his family. When a suspect is discovered, he is invited by the Board of Health to come to the Kalihi receiving station at Honolulu. (p.97)

検査に際しても5名の医師団が加わり、感染が判明しても直ちにモロカイ行きになることはなく、十分な時間（数週間、時には数ヶ月さえも）が与えられるし、モロカイに渡っても身内の訪問が可能であり、さらには再検査を受けるためにいつでもホノルルにもどれる、といったことまで記している。すでに見た日本の実態といかにかけ離れていることであろう。

このほかにもロンドンは、モロカイの収容所の気候・風光を称美し、患者たち自身の所有になる数百頭の馬や各種馬車、あるいは農業・漁業・私有の店を自給の形で幸せに営んでいる姿を写し取る。「6つの教会、YMCAの建物、いくつかの集会所、野外ステージ、競馬場、野球場、運動競技クラブ、いくつもの合唱団、それに2つのブラスバンド」（p.101）と、様々な施設や組織も揃っている。詰まるところハンセン病の主たる恐怖は、患者を見たこともなければこの病について何も知らない人々がその偏見を増幅させていることにある（p.104）、と断ずる。そして、世界各地に赴いた彼にすれば、

… if it were given me to choose between being compelled to live in Molokai for the rest of my life, or in the East End of London, the East Side of New York, or the Stockyards of Chicago, I would select Molokai without debate. (p. 105)

と、当時の悪名高い大都会の一角をいくつか挙げて、そこに住むぐらいならモロカイのほうに永住することを選ぶという。地元ホノルルのスラム街に暮らす人々を見て、

I can readily understand why the lepers, brought up from the Settlement for reexamination, shouted one and all, “Back to Molokai!” (p. 106)

との理解まで示す。

また、かなり進んだハンセン病の手術に鋭意取り組むグッドヒュー医師を賞賛しつつも、

They are baffled in the discovery of a serum wherewith to fight the disease. And in all their work, as yet, they have found no clew, no cure. (p. 109)

と、この時点ではハンセン病を封じる手立てが何らないことに焦燥感を募らせる。そして、その犠牲になったあのダミアン神父のことも、彼の墓の写真 (p. 110) とともに言及している。

最後に引いておきたいのは、ハンセン病絶滅への期待を込めての言、

When more is learned about the disease, a cure for it may be expected. Once an efficacious serum is discovered, and leprosy, because it is so feebly contagious, will pass away swiftly from the earth. (p. 111)

である。この期待感というか予言と取れないこともない発言は、直後に示される「インドだけで、隔離されていないハンセン病患者が推定500万人いる」(p. 111) との驚くべき数字によって確かに空しいようにも響く。それもそのはず、前述の通りこの時点からまだ40年近い歳月の経過を待たなければ、特效薬プロミンは出現しないのであるから。

V

やや詳細に“The Lepers of Molokai”の中身の紹介と跡づけを試みた。すでに見たように、現代日本のハンセン病患者への目に余る対応の仕方がつい最近まで存在したという事実と向きあい、そのうえに、ロンドンがモロカイに滞在したのは今から100年前の1907年7月初め——特效薬も何もない、お手上げ状態だった頃——を重ねあわせるとき、その勇気と“The Lepers of Molokai”に見た慧眼には凄まじさすら感じとれる。筆者は、これまでロンドンを論じる際にはたびたび「体験」をキーワードの1つとして使用してきたが、本稿で取りあげた“The Lepers of

Molokai”にもそれは十二分に活かされた。様々に取り沙汰されたこの時代にあつて、それも夫人同伴でカラウパバの地を踏み、その実態を正確に見てとり、公にした筆のさばきには、何と言つても体験による確信がみなぎっている。それは、主だったものだけでも、アザラシ狩り船（1893）や北米大陸放浪の旅（1894）、あるいは極北の地のゴールドラッシュに加わつたこと（1897）、英国の首都の貧民窟潜入（1902）、従軍記者として日露戦争の現地に赴いたこと（1904）など、すでに頻繁に世界の各地へと足を運び、生命を賭する数々の経験を積み重ねながらライター（書き手・作家・記者）としての確かな腕を磨きつづけたことによるものと考えられる。

最後に、第Ⅰ章で触れた「ジャックのハンセン病の心配は和らいだ」の件について付言しておかねばならない。ハワイをあとにしたロンドン一行は、その後南太平洋のあちこちの島々を巡つていったのだが、赤道直下にあつて熱帯病のイチゴ腫やマラリヤ、水腫病などに苦しめられて、予定では7年もかけるはずだった『スナーク』号の巡航は頓挫をきたしてしまつた。ソロモン諸島にいたとき、

ジャックは、自分の健康のことでますます気を揉みはじめていた。この1週間というもの、彼の両手は水腫病のように腫れあがり、握ると痛いのだ。ロープを引っぱったりすると、痛くてたまらない。そのうえ、両手の皮膚が驚くばかりにむけてきて、その下の新しい皮膚がかたく部厚くなつていった。³⁰⁾

この頃からシドニーで診断が下されるまでの間、つねに彼の頭の中では前章で見たモロカイ島の体験が多分によぎつていたのだろう。

〈付記〉

本稿の初校ゲラが出た直後に、次のようなテレビ報道および記事があつたので、参考までに書き添えておきたい。

1つは、NHK総合テレビ「NHKスペシャル」の1つとして「にっぽん家族の肖像①」と題し、50分番組を組んでいた（2007年5月27日）。鹿児島県の星塚敬愛園に入所中の玉城シゲさんと上野清・正子夫妻が大きく取りあげられた。そして、「引き裂かれた母と息子58年目の再出発」「極限下の夫婦愛」のテーマのもとに過激な現実がリアルに映像化された。

もう1つは、「台湾ハンセン病入所者救え——京の僧侶、支援の輪」というもので、台湾の療養所「樂生院」では、「現在、地下鉄工事に伴つて入所者が転居を迫られて」おり、それに対する抗議の行動に加わるという（京都新聞、2007年6月11日（夕）、p.12）。

注

- 1) Jack London, *John Barleycorn* (New York: The Century Co., February, 1913)
- 2) Russ Kingman, *A Pictorial Life of Jack London* (New York: Crown Publishers, 1979), p. 210.
邦訳は、拙訳書『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』（本の友社、1989）、p. 377.
- 3) 拙稿「ハンセン病を扱ったJ・ロンドンの2短篇」（『立命館経済学』第53巻・第2号、2004）、pp. 225-245.
- 4) 京都新聞、2001年5月11日（金）、p. 1。以下、特記する以外の新聞報道はいずれも本紙より。
- 5) 『ふれあい福祉だより』第3号（社会福祉法人ふれあい福祉協会、2006）、p. 5.
- 6) 同上。

- 7) 武村淳著『故郷に帰りたい』(九州文芸社, 2001), p. 76.
- 8) 同上, pp. 232-3.
- 9) 同上, p. 233.
- 10) 村上絢子著『証言・ハンセン病 もう、うつむかない』(筑摩書房, 2004), p. 82.
- 11) 同上, p. 78.
- 12) 同上, p. 170.
- 13) すでに言及したもの以外にも、所長に懲戒検束権を与えて入所者を監房に監禁、園内でしか通用しない通貨、出産しても胎児同様ホルマリン漬けにしたこと（胎児標本は計114体が発見された）等々、信じがたい人権侵害が罷り通っていたという。
- 14) 村上絢子, 上掲書, p. 172.
- 15) 満田久義編『現代社会学への誘い』(朝日新聞社, 2003), p. 115.
- 16) 同上, p. 124.
- 17) 久保井規夫著『図説 病の文化史—虚妄の怖れを糾す』(柘植書房新社, 2006), p. 128.
- 18) 同上, p. 134.
- 19) 同上, pp. 135-6.
- 20) 同上, p. 150.
- 21) 村上絢子, 上掲書, p. 266.
- 22) 八重樫信之著『絆 「らい予防法」の傷跡——日本・韓国・台湾』(人間と歴史社, 2006), p. 125.
- 23) 拙著『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く』(丹精社, 2001), pp. 12-3.
- 24) 小田部胤著『救ハンセン病の使徒 ダミアン神父』(サンパウロ, 1993), p. 3.
- 25) 村上絢子, 上掲書, p. 233.
- 26) Jack London, *The Cruise of the Snark* (London: KPI Limited, 1986), p. 10.
- 27) Jack London, *The Cruise of the Snark* (London: The Merlin Press Ltd., 1971), p. 91. 以下、本書からの引用は、各引用文のあとにページ数をもって示すこととする。
- 28) Russ Kingman, *op. cit.*, p. 186. 邦訳は、上掲拙訳書, pp. 333-4.
- 29) *Ibid.*, p. 187. 邦訳は、同上書, p. 334.
- 30) *Ibid.*, p. 208. 邦訳は、同上書, p. 372.